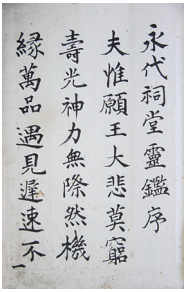
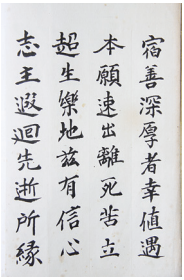
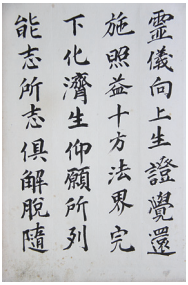
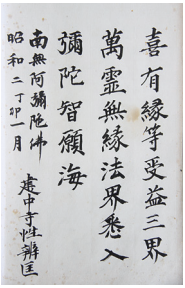
建中寺所伝椎尾辨匡氏直筆永代祠堂靈鑑序について

村上真瑞

建中寺には、昭和二丁卯（ひのとう）一月に書かれた、椎尾辨匡氏（明治九年（一八七六）七月六日―昭和四六年（一九七一）四月七日）満五十歳当時の直筆の永代祠堂靈鑑が相伝され、その序には、大変意義ある文章が書かれている。椎尾氏は、大正十五年（一九二六）に建中寺住職に晋董しているので、昭和二年（一九二七）は、新董直後で、椎尾氏は、同年建中寺境内に、慈友会幼稚園を設立しており、熱気が感じられる序である。今回は、白文で書かれた序を書き下し、現代語訳して、術語の解説、中に説かれた教えの特徴などについて考察してみたい。添付資料の写真のように、序の筆遣いは、楷書でとても丁寧に書かれている。以下解読してみたい。

【本文】

永代祠堂靈鑑序
夫惟願王大悲莫窮
壽光神力無際然機
緣萬品遇見遲速不
宿善深厚者幸値遇
本願速出離死苦立
超生樂地茲有信心
志主遐廻先逝所縁
靈儀向上生證覺還
施照益十方法界完
下化濟生仰願所列
能志所志俱解脱随
喜有縁等受益三界
萬靈無縁法界悉入
彌陀智願海
南無阿彌陀佛
昭和二丁卯一月　建中寺性辨匡

【書き下し】

永代①祠堂②靈③鑑序

④夫れ⑤惟ればの⑥願王の大悲は⑦窮なく、壽光、⑧神力際なし。⑨然り、⑩機縁は⑪萬⑫品⑬遅速せずして⑭遇見ゆ。

⑮宿善深厚なる者は、⑯幸にして本願に⑰値遇して速に死苦を出離して⑱立に⑲樂地に⑳超生す。㉑茲に信心有る㉒志主は、㉓遐に先㉔逝、㉕所縁の㉖霊儀を、上に向ひては㉗證覺を生ぜんと㉘廻し、㉙還りては施して㉚十方法界を㉛完く㉛照益せんとす。

下は㉝化して㉞濟生し、願を㉟仰ぎて㊱列なる所の㊲能志㊳所志倶に解脱す。㊴有縁等に㊵随喜して、㊶三界萬霊㊷無縁㊸法界を㊹受益し悉く㊺彌陀智願海に入る。

南無阿彌陀佛

昭和二丁卯一月　建中寺性辨匡

【現代語訳】

永続して忌日ごとに経を読誦するみたまをうつす鏡。序文

そもそもよく考えてみれば阿弥陀仏の大いなるあわれみはとどまるところがなく、その命も、智慧の光明も、不可思議なる力も際限がない。（まさに）そのとおりである。衆生は、善悪を問わず誰であっても分け隔てなく、早いこと遅いことなく、（阿弥陀仏と）まのあたりに出逢う事が出来る。

今まで収めてきた善根が深くて厚い者は、しあわせにも（阿弥陀仏の）本願に出会う事が出来、すぐさま死の苦しみを離れ出でて、時をおかずに極楽浄土の地に飛びぬけて生まれる。ここにおいて信心の深い供養を依頼した主は、すで

にとおく離れ、先に亡くなった、ゆかりのある位牌に対して、上に向っては真理をさとることが出来るようにと善根をふり向け、もとにもどっては、（人びとに功徳を）分け与えて十方のあらゆる世界をすべて詳細に利益しようと志す。

（また、）下は、（衆生を）教導して救済し、（阿弥陀仏の）本願をふりあおいで尊敬し、切れることなく続く供養を依頼した主と廻向される霊位とをともに苦しみ悩む世界から解放する。自らとかかわりあいのある人々の善き行いを讃歎し、三界の中にいる一切の生あるもの、自らとかかわりあいのない衆生（も含めて）、存在するすべての世界を幸せにし、（それら）あらゆる衆生は、すべて阿弥陀仏の智慧より起こる本願の広き海に入る。

南無阿彌陀佛

昭和二年　丁卯　一月　建中寺性（譽）辨匡

【考察】

以上に説かれている内容は、椎尾辨匡氏が自ら漢文を書かれたものと考えて良いと思う。永代祠堂の霊鑑に書かれる序は、江戸時代から伝わるさまざまなひな形は存在すると思われるが、この序には特別な椎尾氏の思いを見いだすことができる。それは、「宿善深厚」という術語である。以下の語句に記載されているが簡単に説明すると、中村元氏の編纂された、『広説佛教語大辞典』によると、〈宿善〉は「かつて過去世につくられた善」と「人の一代に限って今までにつくった善根」との二つの意味が説明される。それに加えて、【解説】として「浄土真宗では善根開発といい、今まで収めてきた善根がある時期に開きあらわれることによって、信心が得られると説く。」という説明が載っている。

椎尾氏の序に書かれる「宿善深厚」の意味は、まさに、「過去世の善業」の意味ではなく、「浄土真宗の善根開発」の意味に理解すると容易に解釈することができるのである。これは、椎尾辨匡氏は、真宗高田派、名古屋円福寺の五男として生まれたという思想的な背景も大きな影響下にあると思われる。以前拙論で、浄土教における中陰の有無について、

椎尾氏の論を『釋淨土群疑論』と比較して論じたことがあったが、それも椎尾氏の「浄土教に中陰なし」とされる論の背景には、真宗高田派の教義があったからと思われる。今回の永代祠堂霊鑑序の理解には、真宗の重要な術語である、「宿善」が用いられているところに注目すべきであると考えられるである。本来の浄土宗の教義から考えるならば、「宿善深厚」とは述べず、「称名念仏深厚」と説くのではないだろうか。宿善の中に称名念仏が含まれているとは言え、浄土宗の本義であれば、称名念仏を一番先に挙げるのが本来であろう。

【語句】

①ゾドウ　*祠堂　先祖の位牌のまつってある各家の持仏堂のこと。氏寺や菩提所、特に一霊の追善のために建立された一寺や一堂もこれに当たる。また寺院で、檀信徒の先祖の位牌を一か所にまつってある位牌堂のことをいう。本堂の脇壇に檀信徒の位牌を安置したものも祠堂とよばれることがある。この位牌堂で忌日ごとに読誦する経を祠堂経、それに対する供養料が祠堂金。永続的に読誦するときは永代経という。〔広説佛教語大辞典〕708d

②レイ　*霊　*霊　仏典では多く「りょう」と読む。→りょう　1．たましい。みたま。2．神霊。または不思議な力を持つもの。3．キリスト教で説く霊魂。4．霊鳥なる人間のこと。〔広説佛教語大辞典〕1749a-b　*リョウ　*霊　神妙不思議で、人智をもってしてははかりしることのできぬこと。神々しく尊いこと。驚くべき不思議のしるし。ききめ。たましい。→れい〔広説佛教語大辞典〕1732d

③カン　*カンガミル　*鑑【鑒】異体字《常用音訓》カン《音読み》カン（カム）／ケン（ケム）《訓読み》かがみ／かんがみる《名付け》あき・あきら・かた・かね・しげ・のり・み・みる《意味》〔名〕かがみ。光の反射を利用して物の姿・形などをうつす道具。▽昔は水かがみを用い、盆に水を入れ、上からからだを伏せて顔をうつした。春秋時代からのちは、青銅の面を平らにみがいて姿をうつす。「漢鑑（漢代のかがみ）」「宝鑑（たいせつなかがみ）」〔名〕かがみ。姿をうつして見

て、自分の戒めとする材料。戒めとなる手本や前例。「亀鑑キカン（物事の規準になる、占いやかがみ→手本）」「鑑戒」「商鑑不遠＝商鑑遠カラズ」〔名〕かがみ。検討の資料や、手本となる文書。転じて、手形や、人に見せるしるし。〔動〕かんがみる。かがみにうつす。転じて、前例をみてよしあしを考える。また、よく見て品定めをする。検討する。「鑑別」「鑑定」〔名〕大きな鉢ハチ。水かがみに使えるような盆のこと。〔動〕ごらんいただきたいとの意味をあらわす書簡用語。「台鑑」［漢字源］

④ソ　*夫　《常用音訓》フ／フウ／おっと《音読み》フ／フウ《訓読み》おとこ（をとこ）／おっと（をっと）／それ／かの／か／かな《名付け》あき・お・すけ《意味》〔名〕おとこ（ヲトコ）。成年に達したおとこ。「人夫」「丈夫（背たけの大きいおとこ→成年男子）」「匹夫」「頑夫廉＝頑夫モ廉ナリ」〔→孟子〕〔名〕おっと（ヲット）。配偶者であるおとこ。〈対語〉→婦。「吾夫又死焉＝吾ガ夫マタコレニ死セリ」〔→礼記〕〔助〕それ。新しい話題を出すことを知らせるため、文頭につけることば。「夫秦王有虎狼之心＝ソレ秦王虎狼ノ心有リ」〔→史記〕〔指〕かの。物事をさすときのことば。「楽夫天命＝カノ天命ヲ楽シム」〔→陶潛〕〔助〕か。かな。文末につけて、推定や、感嘆の語気を示すことば。「命矣夫＝命ナルカナ」〔→論語〕〔漢字源〕　夫れ（読み）それ　（接続）文の初めに用いて、新たに説き起こすときに用いる語。そもそも。いったい。「―おもんみれば真如広大なり／平家5」〔漢文の訓読で用いる〕〔大辞林 第三版〕

⑤ユイ　*惟　《音読み》イ／ユイ《訓読み》おもう（おもふ）／これ／ただ《名付け》あり・これ・ただ・たもつ・のぶ・よし《意味》〔動〕おもう（オモフ）。心をもっぱらある点に注ぐ。よく考えてみる。「思惟シイ・シユイ」「伏惟＝伏シテ惟フニ」〔指〕これ。これとさし示すことば。▽語調を転じて、強調をあらわすことば。〈同義語〉→維。〈類義語〉→是・→此。「其命惟新＝ソノ命、コレ新タナリ」〔→孟子〕〔副〕ただ。ただそれだけ。▽漢文では「ただ…のみ」「ただ…のままならん」のように訓読する。〈同義語〉→唯。「惟士為能＝タダ士ノミヨクストナス」〔→孟子〕「惟意所適＝タダ意ノ適ス

ル所ノママナラン」〔→司馬光〕《解字》形声。「心＋音符隹スイ」。隹（とり）は音符であり、意味には関係がない。▽惟・維はもと近い物をさし示す指示詞であり、「ただこれだけ」の意から、強く限定することばとなった。また、ある点に限って心を注ぐ意の動詞ともなった。「これ」の意なら「隹」「維」と書き、「ただ」の意なら「唯」と書き、「おもう」の意なら「惟」と書くのが正則。〔漢字源〕

⑥ダイヒガンノウ　＊大悲願王　阿弥陀仏の尊称。日常勤行の回向文に「奉酬大悲願王阿弥陀仏、発遣教主釈迦牟尼仏、六方恒沙証誠諸仏」とあるように、阿弥陀仏は悩み苦しむ衆生を煩悩の世界から救済する広大な慈悲をもつ仏であることから、そのように尊称されている。これに対して釈尊のことを発遣教主や大恩教主と呼んでいる。〔新纂浄土宗大辞典〕

⑦ダウ　＊ヤウ　＊窮《常用音訓》キュウ／きわ…まる／きわ…める《音読み》キュウ／グ／グウ《訓読み》きわまる（きはまる）／きわめる（きはむ）《名付け》きわみ・きわむ・み《意味》ヤウス〔動・形〕きわまる（ヤハマル）。物事がぎりぎりのところまでいってつかえる。また、いきづまって動きがとれない。おしつまったさま。〈類義語〉→困。「困窮」「図窮而匕首見＝図窮マリテ匕首見ハル」〔→史記〕「君子固窮＝君子ハ固ヨリ窮ス」〔→論語〕〔形〕生活が行きづまっている。〈対語〉→通・→達。「貧窮」「窮人」〔動〕きわめる（ヤハル）。ぎりぎりのところまでやり尽くす。つきつめる。さいごまで見とどける。〈類義語〉→究・→尽。「窮尽（きわめつくす）」「窮理＝理ヲ窮ム」「上窮碧落下黄泉＝上ハ碧落ヲ窮メ下ハ黄泉」〔→白居易〕〔名〕行きづまり。いちばん奥の所。はて。へんぴないなか。「窮極」「窮棲キュウセイ」「無窮ムキュウ」「不窮フキュウ」とは、どこまでいってもつかえ止まらないこと。〈同義語〉→無尽。「不窮之功フキュウノコウ」「天壌無窮（天地のように永遠に続く）」「楽亦無窮也＝楽シミモマタ窮マルコト無キナリ」〔→欧陽脩〕《解字》会意兼形声。「穴（あな）＋音符躬キュウ（かがむ、曲げる）」で、曲がりくねって先がつかえた穴。〔漢字源〕

⑧ジンリキ　＊神力　1．佛・菩薩の有する不可思議のはたらき。超自然力の作用。神通力に同じ。不思議な力。威神力。

2．加持力に同じ。〔佛教語大辞典〕795d

*マク　*マク　*莫　《音読み》ボ／モ／バク／マク《訓読み》くれる（くる）／くれ／おそい（おそし）／ない（なし）／なかれ《意味》〔動・名・形〕くれる（ツル）。くれ。おそい（オソシ）。日・年がくれる。日・年のくれ。時刻・時候がおそい。〈同義語〉→暮。「不夙則莫＝夙カラザレバスナハチ莫シ」〔→詩経〕〔動〕ない（ナシ）。否定をあらわす。まるでない。見あたらない。「莫不震畏＝震畏セザルハナシ」〔→詩経〕〔動〕なかれ。禁止をあらわす。…してはいけない。「酔臥沙場君莫笑＝酔ウテ沙場ニ臥ストモ君笑フコトナカレ」〔→王翰〕〔動・名〕ことわる。さからう。うけつけないこと。「君子之於天下也、無適也、無莫也＝君子ノ天下ニオケルヤ、適モ無ク、莫モ無シ」〔→論語〕〔形〕むなしい。はてしなく広い。〈類義語〉→茫ボウ。「寂莫ジャクマク／セキバク」「広莫之野コウバクノヤ」〔→荘子〕「莫莫バクバク」とは、こんもり茂っておおいかくすさま。「維葉莫莫＝コレ葉莫莫タリ」〔→詩経〕《解字》会意。草原のくさむらに日が隠れるさまを示す。暮の原字。隠れて見えない、ないの意。〔漢字源〕

⑨ぜん　*然　しか・も【然も・而も】　副　そのように。さように。万一「三輪山を―隠すか雲だにも」　接続　なおその上に。著聞一六「僅かなるこまらの、―きぬかづきしたるを」「聡明で―美人」―それでも。けれども。史記殷本紀建暦点「湯（とう）を奸（おか）さむと欲（す）るに、而ジ、由（よし）無し」。方丈記「行く川の流れは絶えずして―もとの水にあらず」。「注意され、―改めない」〔広辞苑〕*ぜん　*然　《常用音訓》ゼン／ネン《音読み》　ゼン／ネン《訓読み》しかり／しかれども／しかし／しかるに／もえる（もゆ）《名付け》しか・なり・のり《意味》〔指〕しかり。肯定・同意するときのことば。転じて、「そう、よろしい」と引き受けるのを「然諾」といい、イエスかノーかを「然否」という。「対曰然＝対ヘテ曰ハク然リト」〔→論語〕〔指〕しかり。肯定・同意・承認をあらわすことば。そのとおり。そうだ。「信然＝マコトニ然リ」「果然＝果タシテ然リ」「以為然＝モッテ然リトナス」「其道然也＝ソノ道然ルナリ」〔→荀子〕「若…

然」「如…然」とは、「…のごとくしかり」と訓読して、…のようである、そのようであるの意をあらわすことば。「如不得其意然＝ソノ意ヲ得ザルガゴトク然リ」〔接続〕しかれども。しかし。しかるに。けれども。〈類義語〉→而シカモ。「然今卒困於此＝然レドモイマ卒ニココニ困シム」〔→史記〕「然而ジカシジカサジテ」とは、それだのにの意をあらわす接続詞。「黎民不飢不寒、然而不王者未之有也＝黎民ハ飢#ズ寒エズ、然リ而ウシテ王タラザル者ハイマダコレ有ラザルナリ」〔→孟子〕「然則ジカラバスナワチ」とは、そうだとしたら、そうならばの意をあらわす接続詞。「然則人之性悪、明矣＝シカラバ則チ人ノ性悪ナルコト、明ラカナリ」〔→荀子〕「然後ジカルノチ」とは、そののち、それからの意で、事がらや時間の前後関係をあらわす接続詞。「待師法然後正＝師法ヲ待チテ然ル後正シ」〔→荀子〕「雖然ジカリトイエドモ」とは、そうとはいってもの意の接続詞。〔助〕形容詞や副詞につく助詞。〈類義語〉→焉エン・→爾ジ。「忽然コツゼン」「泰然」「填然鼓之＝填然トシテコレニ鼓ス」〔→孟子〕〔助〕文末について推量や判定の気持ちをあらわす助詞。▽訓読では読まない。「若由也、不得其死然＝由ノゴトキヤ、ソノ死ヲ得ザラン」〔→論語〕〔動〕もえる（ヤイ）。熱を出してもえる。〈同義語〉→燃。「若火之始然＝火ノ始メテ然ユルガゴトシ」〔→孟子〕〔漢字源〕

⑩ヤイ　*機縁　1．時機因縁の略。動機とか機会の意。2．時機と相手の心構え。S.kāla-āśaya　3．衆生のこと。仏からいうと機縁、われわれからいうと機根であるが、ともに衆生のこと。根性ともいう。4．人の素質のよしあし。華厳宗でいう。5．修行者が、仏または師家の導きに接した因縁をいう。6．禅宗で機に臨み、縁に応ずる師の手さばき。7．公案にほぼ同じ。8．禅僧が、他の僧を主題として詩文を書く場合におりこむ、その経歴に関係の深い、しかも世に知られている語。9．起こり。由来。〔広説佛教語大辞典〕253a-b

⑪ヅ　*萬　《常用音訓》バン／マン《音読み》マン／バン／モン《訓読み》よろず（よろづ）《名付け》かず・かつ・すすむ・たか・つむ・つもる・よろず《意味》〔数〕数で、千の十倍。「十万円」〔副〕よろず（ヨロヅ）。非常に数が多いこ

とを示すことば。▽千とともに用いる。「千万」「千変万化」〔形〕よろず（ヨロヅ）。非常に多いさま。「万言」〔副〕ぜったいに。どんなことがあっても。「万万不可＝万万不可ナリ」〔漢字源〕

⑫シナ　＊品　《常用音訓》ヒン／しな《音読み》ヒン（ヒム）／ホン（ホム）《訓読み》しな《名付け》かず・かつ・しな・ただ・のり・ひで《意味》〔名〕しな。いろいろの物。「物品」〔単位〕物の種類を数えることば。「一品」〔名〕物の等級や格差。「品級」〔名〕人の等級や人がら。「人品」「品格」〔名〕官位の等級。▽一品より九品まであり、おのおの上と下、または正と従に分ける。ヒンス〔動〕等級をつける。また、評価する。「品評」「品題」「空品甲乙煩題鐫＝空シク甲乙ヲ品シテ題鐫ヲ煩ハス」〔→高啓〕〔名〕〔仏〕同類のものを一段にまとめたもの。仏典の章や編のこと。▽梵語ジの漢訳。「法華経譬喩品ホケキョウヒユホン」〔国〕昔、大宝令で親王に賜った位。一品イッポンから四品シホンまである。その位のないのを無品ムホンという。「三品の親王」〔漢字源〕

⑬チシ　＊遅速　遅いこととはやいこと。『遅疾チシツ』「所未定知者、修短遅速間＝イマダ定カニ知ラザル所ノ者ハ、修短遅速ノ間ナリ」〔→白居易〕〔漢字源〕

⑭ガウ　＊遇　《常用音訓》グウ《音読み》グウ／グ《訓読み》あう（あふ）／たまたま《名付け》あい・あう・はる《意味》〔動〕あう（アフ）。AとBとがひょっこりあう。転じて、思いがけずに出あう。〈類義語〉→逢ホウ「遭遇」「遇諸塗＝コレニ塗ニ遇フ」〔→論語〕ゲウス〔動〕相手と関係しあう。また、ある態度で相手にのぞむ。「待遇」「礼遇」「殊遇（特別のもてなし）」〔名〕出あい。チャンスに出あって運がよいこと。「遇不遇（運のよしあし）」「際遇（めぐりあわせ）」「未遇（まだチャンスにあえない下づみの人）」〔副〕たまたま。ひょっこりと。思いがけず。〈類義語〉→適。「遇然」「遇識之＝タマタマコレヲ識ル」《解字》会意兼形声。禺ゲは、頭が大きくて人に似たさるを描いた象形文字で、よく似た相手や二つのものがペアをなすとの意を含む。遇は「（足の動作）＋音符禺」で、AとBが歩いていき、ふと両者が出あって、

ペアをなすこと。〔漢字源〕

⑮シュクゼン　＊宿善　1．かつて過去世につくられた善。善き宿業。前世の善業。過去世の善根。【解釈例】さきの世の善。2．人の一代に限って今までにつくった善根をさすこともある。【解説】浄土真宗では善根開発といい、今まで収めてきた善根がある時期に開きあらわれることによって、信心が得られると説く。そういう善根を積んできていないものを無宿善の機という。〔広説佛教語大辞典〕791b-c

⑯コウ　＊幸　《常用音訓》コウ／さいわ…い／さち／しあわ…せ《音読み》コウ（コウ）／ギョウ（ヤさき）《訓読み》しあわせ／さいわい（さいはひ）／さいわいにして（さいはひにして）／さいわいとする（さいはひとす）／ねがう（ねがふ）／みゆき／さち《名付け》さい・さき・さち・たか・たつ・とみ・とも・ひで・みゆき・むら・ゆき・よし《意味》〔名〕さいわい（サイワヒ）。しあわせ。ひどい目にあわないですむこと。〈同義語〉→倖。「徼幸＝幸ヲ徼ム」「丘也幸＝丘ヤ幸ヒナリ」〔→論語〕〔副〕さいわいにして（サイワヒニシテ）。運よくやっと。「幸而得之＝幸ヒニシテコレヲ得タリ」〔→孟子〕〔動〕さいわいとする（サイワヒトス）。ねがう（ネガフ）。これはしめたと思う。うまくいったと考える。「幸災楽禍＝災ヒヲ幸ヒトシ、禍ヲ楽シム」「幸災不仁＝災ヒヲ幸ヒトスルハ不仁ナリ」〔→左伝〕コウス〔動・名〕みゆき。天子が出かけることをいう敬語。▽思いがけないさいわいの意から。「行幸」「蜀主窺呉幸三峡＝蜀主呉ヲ窺ヒテ三峡ニ幸ス」〔杜庸〕コウス〔動・名〕君主にかわいがられる。君主のめぐみ。▽思いがけないさいわいの意から。「寵幸チョウコウ」「得幸＝幸ヲ得・幸セラルヲ得」〔国〕さち。（イ）さいわい。（ロ）山や海からの収穫物。「海の幸、山の幸」〔漢字源〕

⑰チグウ　＊値遇　1．楽しませること。2．会うこと。仏に会うこと。〔広説佛教語大辞典〕1169b

⑱リュウ　＊リツ　＊立　《常用音訓》リツ／リュウ／た…つ／た…てる《音読み》リツ／リュウ（リフ）《訓読み》たつ／たてる（たつ）／たちどころに／リットル《名付け》たか・たかし・たち・たつ・たつる・たて・たる・はる《意味》〔動〕

たつ。たてる（タツ）。しっかりと両足を地につけてたつ。安定させてたてる。「起立」「立像」「立不中門＝立ツニ門ニ中セズ」〔→論語〕［動］たつ。足を地につけて、しっかりと生活をする。「三十而立＝三十ニシテ立ツ」〔→論語〕［動］たてる（タツ）。組織・きまり、仕事の基礎などをしっかりきめる。〈対語〉→廃（やめる）。〈類義語〉→樹（たてる）。「自立」「立国＝国ヲ立ツ」「立法度＝法度ヲ立ツ」［動］たつ。たてる（タツ）。位につく。とりあげて位につかせる。後つぎにきめる。〈類義語〉→廃（やめさせる）。「立太子＝太子ヲ立ツ」「立其中子＝ソノ中子ヲ立ツ」〔→史記〕［動］たつ。季節の気配がたちおこる。「立春」［副］*たちどころに。「立応＝立チドコロニ応ズ」「剣堅故不可立抜＝剣堅シ故ニタチドコロニ抜クベカラズ」〔→史記〕〔国〕リットル。容積の単位。一リットルは約五合五勺。▽フランス語ｌｉｔｒｅに当てた字。〔漢字源〕*タチドコロニ《副》すぐその場で。時をおかずに。すぐさま。すぐに。たちまち。即座に。たちどころにおいて。たちどこに。たちどころをさらず。

※延喜式（927）祝詞（享保版訓）「高つ鳥の殃に依りて、立処爾（タチトコロニ）身亡せにき」※百座法談（1110）三月九日「もろもろの煩悩たちところにのそかる」【精選版 日本国語大辞典】

⑲ラクチ　*樂地　極楽浄土の地

⑳チョウ　*超　《常用音訓》チョウ／こ…える／こ…す《音読み》チョウ（ﾁｮｳ）《訓読み》こす／こえる（こゆ）／とおい（とほし）《名付け》おき・き・こえる・こゆる・たつ・とおる・ゆき《意味》［動］こえる（ｺｴﾙ）。障害物をとびこえる。〈類義語〉→越。「挾大山以超北海＝大山ヲ挾ンデモッテ北海ヲ超ユ」〔→孟子〕［動・形］とびはなれてすぐれる。ぬきんでる。とびぬけた。世の中からぬけ出た。「超人」「超俗」［形］とおい（ﾄｵｲ）。かけはなれているさま。とおくてはるかなさま。「超遠」〔漢字源〕中間をこえて完全なニルヴァーナに入ること。S:pluta〔広説佛教語大辞典〕1185c

㉑ココ　*茲　読み　音読み「ジ」「シ」訓読み「しげる」「ます」「ますます」「ここ」「ここに」意味　しげる。草が盛ん

に生える。ます。ますます。ここ。ここに。部首「艹（くさかんむり）」〔漢字辞典〕

㉒ジュ　*志主　塔婆を供える場合に、施主と書かれた下には塔婆を供える方の氏名が記される。施主とは代表者名で、次の方からは「志主」と記されることもある。施主と同意。

*セジュ　*施主　布施を行う本人のこと。一般には葬儀や法事などの主催者がこれに当たる。葬儀の場合、通常は喪主が施主であるが、法要の主催者である喪主と実際に費用を負担する施主を区別する場合もあり多様化している。また年回法要などで卒塔婆を供養する場合、地域によっては法要の主催者の卒塔婆を施主塔婆、参加者が供養する場合は志主塔婆と区別することもある。〔新纂浄土宗大辞典〕

㉓カ　*カ　*ハルカ　*遐　《音読み》カ／ゲ《訓読み》とおい（とほし）／はるか（はるかなり）／とおざける（とほざく）／なんぞ《意味》〔形〕とおい（トホシ）。はるか（ハルカニ）。とおくかけ離れたさま。「欲与稷契遐相希＝稷契ト遐カニアヒ希ハント欲ス」〔→王安石〕〔形〕おおいかぶさるさま。おおきい。「遐福カフ」「遐被ヒ」〔動〕とおざける（トホキウ）。とおくに離れさせる。「既見君子、不我遐棄＝スデニ君子ヲ見レバ、我ヲ遐ケ棄テザラマシ」〔→詩経〕〔疑〕なんぞ。疑問をあらわすことば。▽「遐不…」は、「なんぞ…ならざらん」と読む。何や胡に当てた用法。「楽只君子、遐不眉寿＝楽シメル君子ハ、遐ゾ眉寿ナラザラン」〔→詩経〕《解字》会意兼形声。右側の字（音カ）は、上にかぶさる、大きいの意を含む。遐はそれを音符とし、辶を加えた字。大きくへだたること。〔漢字源〕

㉔セイ　*逝　《常用音訓》セイ／ゆ…く《音読み》セイ／ゼ《訓読み》ゆく／さる《意味》〔動〕ゆく。さる。いってしまう。思いきってたち去る。また、ふっつりと死ぬ。「逝者如斯夫＝逝ク者ハ斯クノゴトキカ」〔→論語〕「雖不逝兮＝雖逝カズ」〔→史記〕《解字》会意兼形声。「辶＋音符折」。ふっつりと折れるようにいってしまうこと。

㉕ジョエン　*所縁　1．認識の対象。対象としてとらえるもの。対象。2．ゆかりある者。〔佛教語大辞典〕681c

㉖レイギ　*霊儀　位牌をいう。これは亡霊の儀容（すがた）を現したものであるから、このようにいう。〔広説佛教語大辞典〕1749b

㉗ジョウガク　*證覺　真理をさとること。〔広説佛教語大辞典〕838c

㉘ロ　*廻　1．ひっくりかえす。廻入する。転回する。2．否定する。3．廻向の略。めぐらす。ふり向ける。〔広説佛教語大辞典〕119c

㉙ゲン　*還　1．かえる。還帰する。2．（この世に）もどる。3．本源にもどって無に帰すること。還滅。輪廻からニルヴァーナに向かう聖道をいう。数息観の第五段階。4．心に実体がないということを知ること。S.nivartanā　5．また。6．そもそも、いったいの意。7．やはり。むしろ。逆に。8．あとでは。〔広説佛教語大辞典〕392b-c

*ゲン　*カン　*還　《常用音訓》カン《音読み》カン／ゲン／セン／ゼン／カン《訓読み》　かえる（かへる）／かえす（かへす）／めぐらす／めぐる《意味》〔動〕かえる（カヘル）。円をえがいてもとへもどる。いったのがもとの場所へもどる。〈類義語〉→返・→復・→旋。「帰還」「還自鄭＝鄭ヨリ還ル」〔→左伝〕カン〔動〕ふりかえる。「還視（かえりみる）」「羽還叱之＝羽還シテコレヲ叱ス」〔→漢書〕〔動〕かえす（カヘス）。もとの所・所有者へもどす。やりかえす。相手の希望にこたえる。「返還」「還願」〔副〕〔俗〕また、まだ、なおの意をあらわす中世以後のことば。〈類義語〉→尚。「還有（まだある）」カン〔動〕めぐらす。わくを設けて周りをとりまく。私利を守る。「内則大夫自還而不尽忠＝内ハスナハチ大夫ミヅカラ還シテ忠ヲ尽クサズ」〔→管子〕〔動〕めぐる。ぐるぐるとまわる。▽旋さ（めぐる）に当てた用法。「周還シュウさ（＝周旋。ぐるぐるとまわる）」〔形〕くるくるめぐるさま。身のこなしがはやい。〈同義語〉→旋。〔漢字源〕

㉚ジッポウホッカイ　*ジッポウホッカイ　*十方法界　十方のあらゆる世界。全宇宙。〔広説佛教語大辞典〕706b

㉛カン　*完　《常用音訓》カン《音読み》カン／ガン《訓読み》まったし／まっとうする（まったうす）／おわる（をは

る）《名付け》さだ・たもつ・なる・ひろ・ひろし・まさ・また・またし・みつ・ゆたか《意味》〔形〕まったし。全部そろっていて欠け目がない。ぐるりととりまいているさま。〈対語〉→欠ケツ。〈類義語〉→全。「完全」「城郭不完＝城郭完カラズ」〔→孟子〕〔動〕まっとうする（マッタウス）。全部やり遂げる。また、欠け目なく守り通す。「臣請完璧帰趙＝臣請フ、璧ヲ完ウシテ趙ニ帰ラン」〔→史記〕〔動〕おわる（ヲハル）。全部すむ。やり遂げる。「未完」「完了」《解字》会意兼形声。元ゲンは、まるい頭を描いた象形文字。完は「宀（やね）＋音符元」で、まるくとり囲んで欠け目なく守るさまを示す。〔漢字源〕

㉜ジョウ　*照　《常用音訓》ショウ／てる・てらす・てれる《音読み》ショウ（セウ）（去）嘯〈笑〉（ｚｈａｏ）《訓読み》てーる，てーらす❶〔動詞・形容詞〕てーる。てーらす。右から左まで、または上から下まで、円を描くようにてらす。また、鏡にうつす。「反照（てり返し）」「照鏡＝鏡に照らす」「日月所照＝日月の照らす所」〔中庸〕❷ショウたり（セウたり）〔形容詞〕すみずみまで光がなでるさま。「月出照＝月出いでて照たり」〔詩経・陳風・月出〕〔動詞〕てーらす。手本や事柄を基準にする。よる。［類義語］依。「照旧＝旧に照らす」❸〔動詞〕てらし合わす。問い合わせる。「照会」「照合」「査照（調べ合わせる。またてらし合わせる旅券や許可証）」❹〔名詞・動詞〕［俗語］写真。写真をとる。「照相チァオシァン（写真）」❺姓の一つ。❻［日本］てーる。晴れる。てーり，てーれる　会意兼形声。召は「口＋（音符）刀」からなり、刀の刃の曲線のように、半円を描いてまねきよせること。昭は「日＋（音符）召」の会意兼形声文字で、半円を描いて、右から左へと光がなでること。照は「火＋（音符）昭」。昭があきらかの意の形容詞に用いられるため、さらに火印を加えて、すみからすみまで半円形にてらすことを示す。　召き・あきら・あり・てらし・てらす・てり・てる・とし・のぶ・みつ［漢字源 改訂第五版］

㉜さ　*益　1．他人のためになることをする。S:anugraha　2．…のために。3．成長させること。4．ためにな

ること。利益の略。〔広説佛教語大辞典〕1676d

㉜ジョウサク　*照益　すみからすみまで光が照らすように他人を利益する。

㉝ケ　*化　1．導く。救う。教化する。導き。信仰に入るようにしむけること。教導ともいう。2．制する。3．変化して出されたもの。仮のすがたを現したもの。4．変化に同じ。（仏又は菩薩が）あえて生存の状態に現れて、けがれのない一切の所作を実行することにたとえる。5．生まれ変わること。6．化佛、化身。應化身。7．化境のこと。8．高僧が死ぬこと。遷化の略。他方に教化を遷する意。〔広説佛教語大辞典〕355a-b

㉞キイ　*済　*濟　《常用音訓》サイ／す…ます／す…む《音読み》サイ／セイ／ザイ《訓読み》すます／すくう（すくふ）／なす／わたる／わたす／すむ《名付け》いつき・お・かた・さだ・さとる・すみ・ただ・とおる・なり・なる・まさ・ます・やす・よし・わたす・わたり・わたる《意味》〔動〕すくう（スクフ）。不足を補って、平等にならす。困っている者に当てがって、水準の線までそろえてやる。「救済」「経世済民サイセイキイミン（世の中を調整して人民の生活のでこぼこをなくする）」「博施於民而能済衆＝博ク民ニ施シテヨク衆ヲ済フ」〔→論語〕〔動〕なす。でこぼこや過不足を調整する。ととのえてまとめあげる。「済美＝美ヲ済ス」「無済於事＝事ニ済ス無シ」〔動〕わたる。わたす。川や難路を無事に通り切る。また、通す。サイス〔動〕障害を除いてうまく調整する。「鑿河八十里以済不通＝河ヲ鑿ツコト八十里モッテ不通ヲ済ス」〔→枕中記〕〔名〕やりくり。「取済於一時＝済ヲ一時ニ取ル」〔→欧陽脩〕〔名〕川名。済水。河南省済源県に源を発し東南に流れて黄河にはいる。下流は大小の支流にわかれる。昔は黄河本流と並行して東流し、渤海ボッカイに注いだ。▽河水を調整して流したので済という。「済済サイサイ・キイキイ」とは、数多くそろっていてりっぱなさま。「済済多士＝済済タル多士」〔→詩経〕〔仏〕「済度サイド」とは、仏道によって人を極楽へわたすこと。〔国〕すむ。終わる。また、うまくやりすごす。〔漢字源〕

㉞キイジョウ　＊濟生　衆生を救済すること。【解釈例】衆生を救ふ。〔広説佛教語大辞典〕540c

㉟ゴウ　＊ギョウ　＊仰　《常用音訓》ギョウ・コウ／あおぐ・おおせ《音読み》ギョウ（ギャウ）・コウ（カウ）・ゴウ（ガウ）（上）養（yǎng）《音読み》ギョウ（ギャウ）・コウ（カウ）・ゴウ（ガウ）（去）漾（yǎng）《訓読み》あおーぐ，おおーせられる，おっしゃーる，おおーせ　❶〔動詞〕あおーぐ（あふグ）。高い方を見あげる。［対語］伏・俯フ。「仰不愧於天＝仰ぎて天に愧はぢず」〔孟子・尽上〕❷〔動詞〕あおーぐ（あふグ）。ふりあおいで尊敬する。「景仰ケイギョウ・ケイコウ」「仰之弥高＝之これを仰げば弥いよいよ高し」〔論語・子罕〕❸〔名詞〕上級から下級に命じる公文書の最初の部分につけることば。❹姓の一つ。〔動詞〕あおーぐ（あふグ）。他人から物をもらう。また、何かしてもらう。「仰仗ギョウジョウ（他人にたよってしてもらう）」「以衣食異、無仰於漢也＝衣食異にするを以つて、漢に仰ぐ無なきなり」〔史記・匈奴〕［日本］①おおーせられる（おほセラル）。おっしゃーる。身分の高い人が話したり命令したりすることの尊敬語。②おおーせ（おほセ）。身分の高い人の命令やことば。「主君の仰せ」あおーのく，あおーのけ　会意兼形声。卬ゴウは、高くたって見おろす人と低くひざまずき見あげる人との会意文字。仰は「人＋（音符）卬」で、かみあう動作を意味する。［漢字源 改訂第五版］

㊱レツ　＊列　《常用音訓》レツ《音読み》レツ／レチ《訓読み》つらなる／つらねる（つらぬ）《名付け》しげ・つら・とく・のぶ《意味》〔名〕ずらりと横に並んだもの。転じて、仲間の意。▽縦に並んだのを行という。「行列」「比諸侯之列＝諸侯ノ列ニ比ブ」〔→史記〕レッス〔動〕つらなる。つらねる（ツラヌ）。ずらりと並ぶ。また、並べる。「列名＝名ヲ列ヌ」「姉妹弟兄皆列土＝姉妹弟兄ミナ土ヲ列ヌ」〔→白居易〕〔形〕ずらりとたくさん並んださま。「列国」「列強」〔漢字源〕つらな・る［3］【連なる・列▽なる】（動ラ五［四］）①一列にならんで続く。切れることなく続く。「雁がー・る」「国境にー・る山々」②会などに出席する。列席する。「末席にー・る」③団体などの一員として加わる。「幹事にー・る」

④つながる。関係を持つ。「忽に釈迦の遺弟に―・り／平家（灌頂）」⑤連れ立つ。「同じ郷の者三人と―・りて水銀を掘る所に行きぬ／今昔（17）」〔「連ねる」に対する自動詞〕〔大辞林〕

㊲ゾ　＊能　《常用音訓》ノウ《音読み》ノウ／ノ／ドウ〉／ダイ／ナイ／タイ《訓読み》あたう（あたふ）／よくする（よくす）／よく／ゆるす／たえる（たふ）／のう《名付け》たか・ちから・とう・のり・ひさ・みち・むね・やす・よき・よし《意味》〔動・助動〕あたう（ヲ47）。よくする（ヨクス）。よく。物事をなしうる力や体力があってできる。たえうる。りっぱにたえて。しっかりと。「非不能也＝能ハザルニアラザルナリ」〔→孟子〕「能近取譬＝能ク近ク譬ヲ取ル」〔→論語〕〔名〕事をやりうる力。はたらき。「有能」「技能」「才能」〔形〕やりての。仕事たっしゃな。「能弁」「能者」〔動〕ゆるす。やんわりとたえる。柔らかに接する。「柔遠能邇＝遠キヲ柔ラゲ邇キヲ能ス」〔→詩経〕〔動〕たえる（ヲ7）。物事をなしうるだけの力がある。また、仕事をなしうる力があって任にたえる。〈同義語〉→耐ヲ1。「鳥獣毳毛其性能寒＝鳥獣ノ毳毛ハソノ性、寒キニ能フ」〔→漢書〕〔名〕ねばり強いかめ。▽平声に読む。〔国〕のう。能楽のこと。〔漢字源〕

㊳ゾ　＊所　1．…られる、の意。受け身を示す。2．作用を示す。たとえば、所作・所相。3．客観。4．地点。場所。5．（1）人及び物に対する関係代名詞。常に主語の後、動詞の前に位置する。（2）所を含む特有語法はさまざまある。「所自」または「自所」は、そこから由来するところの、の意。「所之」は、ゆくところ、の意。「所為」は、その人が原因で、の意。「所以」は、…するところのもの、…に関して、…するためのもの、…なので、…するところの事の意。（3）ところのものを（対格）。ところの人から（奪格）。（4）場所を表し、また場所を表す関係詞として用いられる。「所于」または「于所」は、いかなる所において、の意。「無所」は、とどまる所がない、の意。（5）宮殿または寺院の数を示す。何か所。（6）「在所」「所在」は、あるものがいるところ、の意。「其所」は、いきるよりどころの意。（7）道（まっすぐな道、正義）。（8）「所…者」は、ところのもの、ところの人の意。二字の間には二字から十字が挿

入される。（9）「所以…者」は「所…者」の具格として二字から十字が挿入される。（10）可（できる）。「所以」は「可以」（可能なり）の意。（11）若（もし）。（12）或（偶然に、ひょっとして）。（13）意味のない助詞として用いる。〔広説佛教語大辞典〕823d-824a

㊲能志（のうし）　志すもの＝施主・志主のこと。

㊳所志（しょし）　志されるもの＝廻向される霊位のこと。

㊴ウエン　*有縁　1．認識の対象をもっている。Ssālambana　2．因縁、関係ある、の意。3．有為の諸縁。存在を成立せしめる間接的原因。4．自らとかかわりあいのある人。〔表現例〕えにしを得たる人。〔広説佛教語大辞典〕99c

㊵ズイキ　*隨喜　1．他人が善き行いを修して徳の成ずることを喜ぶこと。他人の善き行いを讃歎すること。他人の善事を見てともどもよろこぶこと。2．同意すること。3．佛教の儀式に参列すること。4．滅罪の修行としての懺法などのこと。〔佛教語大辞典〕808

㊶サンガイバンレイ　*三界萬霊　三界の中にいる一切の生あるものども。精霊。〔広説佛教語大辞典〕564b　《名》仏語。三界におけるすべての霊あるものの意。修めた功徳を回向する時などにいう。※正法眼蔵（1231 - 53）洗面「師匠を拝し、三宝を拝し、三界万霊十方真宰を拝す」〔精選版 日本国語大辞典〕

㊷ムエン　*無縁　1．原因条件のないこと。2．対象がないこと。認識の対象のないこと。有縁に対する。3．対象の区別がないこと。理想としては、ありとあらゆるものを平等と観じ、空を認めるがゆえに、絶対の慈悲は対象をもたない。→無縁の慈4．存在しないこと。非存在。5．縁のないもの。繋属のないこと。6．救われる機縁のない者。7．世間のよるべのないこと。〔広説佛教語大辞典〕1607c-d

㊸ホッカイ　*ホウカイ　*法界（dharma-dhātu）意識の対象、考えられるものの意。十八界の一つ。また、存在するものの意で、

有為法、無為法の全てを指す。さらに事物の根源、存在の基体の意を表し、しばしば真理そのもの眞如と同義とされる。〔岩波仏教辞典〕

㊹ジュヤク　*ジュエキ　*受益　利益を受けること。〔広辞苑〕恵まれる。幸せになる。〔日中対訳辞書〕

㊺ミダイガンカイ　*彌陀智願海　阿弥陀仏の本願の広きことを海にたとえた語。→彌陀本願【解釈例】弥陀の智慧より起こる本願ゆゑに願海といふ。〔広説佛教語大辞典〕1581d

キーワード　椎尾辨匡氏　永代祠堂霊鑑序

（むらかみ　しんずい　東海学園大学共生文化研究所　研究員）